

# スパイス

田端

ガリ

【人物一覧表】

木田 美子（25）

井上 樹梨（25）

彼氏

元カレ

○電車・内

満員電車の車内。

木田美子（25）、人に押しつぶされそうになりながら、ふと角に立っているカップルを見る。  
カップルは頬を突いたりし、いちやついているが、女性の顔は絶妙に見えない。  
美子、イライラを隠すように視線をずらし、広告を見る。

1

○居酒屋・夜

美子「満員電車をお前らのスパイスにするな！」

と、力強くグラスを置く。

美子の正面に座っている井上樹梨（25）。

樹梨「今度は何？」

美子「満員電車の角。あの一番いいところあるでしょ？」

樹梨「寄っかかることできる場所ね。」

美子「あそこでいちゃついているカップルがいたのよ。信じられない。私ああいうの本当に無理。」

樹梨「ふーん。」

美子「え、ムカつかない？話聞いただけでも。」

樹梨「別に話聞いただけだからムカつかない。」

美子「そっか……多分、あの子たちはさ、密室だと勘違いしているんだよ。」

樹梨「勘違いしないでしょ。人いっぱいいるんだから。」

2

美子「逆だよ。人がいっぱいいると人が壁にしか見えないんだよ。角に立ち、彼氏が壁となり彼女を守る。密着する二人はもう周りなんて見えない。頬を突き、頭をなで、

最終的には……」

樹梨「チューしてたの？」

美子「してなかった。」

樹梨「してないんかい。」

美子「いや、私がすぐ降りたからその後が見

れなかっただけで、多分してたねあの後。  
彼氏がさりげなくチュツと。」

樹梨「私、妄想の話なら聞かないよ。」

美子「ごめんごめん。でもむかついちゃって  
さ。私、夜勤に向かう途中だったから。」

樹梨「あー……」

美子「私は土曜日の15時から次の日の9時  
まで仕事だっというのに、あの子たちはこ  
れから二人で街へ行き、ディナーを共にし、  
夜景の見えるところで逆円錐の取っ手が細  
いグラスでお酒を飲むのになって。」

3

樹梨「オリーブ入ったやつね。」

美子「そう。で、彼女が聞くんだよ。（ぶった  
声で）このオリーブって食べるの？（声を  
低く）ああ、このオリーブはね。」

と、オリーブを食べるジェスチャーを  
する。

美子「（声を低く）このオリーブは食べれるん  
だよ。（ぶった声で）ちよっと！私のオリ  
ブ食べないでよ！アハハ！アハハ！」

樹梨「一方、美子は？」

美子「一食250円の手作り手抜き冷凍弁当をレンジでチンしてる。23時30分。600ワットで5分。待っている間、広告に流れてくる胡散臭いゲームを無心でする。」

樹梨「ホテルマンも大変だね。」

美子「私の人生。こんなにうまくいかないものかね。愛に飢えてるわ。」

樹梨「いや、美子彼氏いるじゃん。」

美子「……」

と、机に突っ伏す。

樹梨「え、別れたの？」

美子「ん。」

樹梨「いつ？」

美子「一昨日。」

樹梨「なんで。」

美子「面倒くさいって。」

樹梨「何がさ。」

美子、顔を上げ、

美子「家事への口出し、服装への口出し、デ

ト先での口出し、そして……」

樹梨「そして？」

美子「話が長い。」

樹梨「なにもわかってないじゃん。話長いのが美子じゃん。」

美子「付き合う前は自我を押しつぶしていたもので……」

樹梨「清楚系だって言われたって喜んでたもんね。そういうことだ。嘘ついてたんだ。」

美子「嘘。嘘か。そうか私嘘ついてたのか。」

樹梨「うん。悪い嘘だとは思わないけどね。」

5

美子「結果別れてるならこれは悪い嘘じゃない？」

樹梨「結果が悪かっただけで全部がダメなの？このままうまくいっていたなら、それは良い嘘になったでしょ？多分。」

美子「そうかな？」

樹梨「多分。」

美子「無責任だな。」

樹梨「美子の問題だもん。私がどうこう言う

問題じゃない。」

美子「そうだけど……」

樹梨「ま、私はそんな嘘は絶対につかないけどね。」

美子「つくでしよ樹梨も。」

樹梨「美子ほどはつかないよ。美子ほどは。」

美子「私、そんなに嘘ついてる？」

樹梨「さっきも嘘ついてたよ。」

美子「え、ついてないよ。」

樹梨「満員電車。」

美子「え？」

樹梨「してたよ。角で。スパイス。あんたが付き合いたての頃。」

○（回想）電車・内

樹梨、満員電車のなか座り、本を読む。  
ふと顔を上げると、角に元カレに壁になってもらっている美子を見つける。

樹梨「（小声で）美子……」

美子、元カレに頬を突かれたり、頭を



なでられたりし、最終的に隠れるようにキスをする。

樹梨、ニヤニヤしながらコソコソとカメラを向けている。

## ○居酒屋・夜

樹梨、隠し撮った動画を美子に見せる。

美子「え、え、え？」

樹梨「めっちゃしてんじゃん。スパイス。」

美子「いやいやいや、いたの？そんでなんで撮ってるの？盗撮！」

7

樹梨「友達ならいいでしょ。将来、美子の結婚式の動画とかで使えるかなって。それより見てよ。この美子の顔。」

美子「結婚式にこんな生々しい映像流さないでしょ。別れたし！あと見ないで！」

と、樹梨からスマホを奪おうとする。

樹梨「やめてよ！私が楽しんでいるの！」

と、美子から取られないようにスマホを後ろに隠す。

樹梨「で？どうだった？」

美子「何がよ。」

樹梨「周りが壁に見えた？」

美子「うるさい。」

樹梨「さりげなくチュツとした？」

美子「うるさい！」

樹梨「オリーブ食べられた？」

美子「食べられてない！夜景も見えない！そもそもそんなところ連れて行ってくれなかった！」

樹梨「……ま、美子には円錐より取っ手がついた円柱のグラスが似合うよ。」

美子、お酒を一気に飲み干し、

美子「自覚あるよ。こっちの方が美味しいし。

すみません！ハイボール一つ！」

と、店員に注文する。

樹梨「でもさ、楽しいよね。二人だけの世界って。」

美子「ま、そのときはね。周りからどう思われるかなんて考えないもんね。」

樹梨「それだけでいいよね。」

美子「そうね……」

樹梨「じゃあ許せるね。今日の二人も。」

美子「うーん……どうしようかな……」

樹梨「許してあげなよ。」

美子「なんで許させようとするのよ。」

樹梨「だって、ずっと恨んでいる人が多いよ  
り、許してあげた人が多い方がよくない？」

美子「そうだけどさ……」

店員「お待たせしました。ハイボールです！」

と、美子の前にハイボールが置かれる。<sup>9</sup>

美子「ありがとうございます！」

と、ぐびぐびとハイボールを飲み、

美子「うーん……いいや！許してやるか！」

樹梨「いいね！さすが美子だ！」

美子「その代わり、今日は飲むぞ！」

樹梨「お供します！美子様！」

と美子と樹梨、乾杯をする。

○（回想）電車・内

美子、列に並び、電車を待つ。  
電車が到着し扉が開き、満員電車の中に無理やり入る。  
樹梨、彼氏と角にいるが美子に気づかない。  
樹梨、彼氏といちゃつき始める。  
視線を感じ、その方向を見るとイライラして広告を見ている美子を見つける。

樹梨「あ……」

彼氏「どうしたの？」

樹梨「友達いるかも……」

彼氏「まじ？」

と、彼氏、いちゃつき続ける。

樹梨「ちよつと……」

彼氏「いいじゃん。大丈夫でしょ？」

樹梨「……まあ、大丈夫か。」

と、樹梨もいちゃつき始める。

（終）